

2014

The background of the image is a close-up of an open notebook. The left page shows a pencil sketch of a person lying down, with their head tilted back and arms extended. The right page shows a pencil sketch of a person lying on their back, with their head resting on a pillow and arms bent. The sketches are done in a loose, expressive style. The text 'Department of Japanese Painting' is overlaid in a large, green, serif font across the center of the notebook pages.

Department of Japanese Painting

武蔵野美術大学日本画学科

「動物画の魅力—生きものの命を見つめること」

日本画学科の授業では1年次2年次は日本画や絵画の基礎を学びますが、2年次になると動物制作の課題があります。5週間を費やす素描と制作は、動物園へ行く、アヒル池の鯉や庭の孔雀を写生するなど、生きものを身近で観察して素描することから始まります。アトリエには鯉や鰻が入った水槽、時には近隣の動物専門店から借りた鷹や梟、イグアナなど、目前で動物独自の形態を掴みながら素描することで、小さな命と間近に対峙する喜びがあります。その後、素描をもとにして制作していきますが、構図や空間、イメージなど構想を練りながら日本画の絵具で作品化をすることで、素描で描かれた動物たちは各自の絵画世界の中で、自由に棲息することになるのです。

動物や鳥たちは日本美術の歴史のなかで、いつ頃から絵に描かれて来たのでしょうか。平安・鎌倉時代に代表される「鳥獣人物戯画」では、擬人化された兎や蛙、そして象や麒麟、猿、龍といった海外や架空の様々な動物たちが線描で描かれ、日本最古のアニメーションと言われる絵巻物として有名です。また、大陸との交易が盛んに行われた時代でもあり、大陸の文化と共に日本へもたらされた象や麒麟、孔雀などの動物が、この頃に存在していたとも言われています。安土桃山、江戸時代になると、俵屋宗達、伊藤若冲、円山応挙、長沢芦雪などの個性的な絵師たちの出現により、それまでの絵巻物や仏画に描かれた動物表現とは趣が異なり、生き生きとした動物そのものを主題とした大作による絵画が生まれました。例えば宗達が杉戸に描いた「白象図」や、若冲の「動植綵絵」に登場する鶏、虫、魚たちは大胆にデフォルメされ、それまでにない斬新な構図と強烈な色彩の作品となっています。また、犬や猫、小鳥などの身近にいる小動物を描いた絵画からは、日本人の日常にある動植物を愛でる自然観さえ感じることができます。

近代になり、日本の絵画は西洋の油彩と区別するために「日本画」という名称が生まれました。そうした中、西洋の影響を受けながら、日本画家たちは積極的にその手法である遠近法や光と影を日本画に駆使しました。明治の画家、竹内栖鳳の「大獅子図」は渡欧中に見たライオンの逞しさに惹かれて描いたもので、大作の金地屏風にいる二頭のライオンは、墨淡彩で描かれながらも西洋的な光の陰影で捉え、百獣の王としての存在感を放っています。他には木島櫻谷、榊原紫峰、徳岡神泉など、写生をもとにした独自の動物絵画世界が生まれました。

今日の日本画では、多くの画家たちが様々な素材や技法による多様な絵画を展開しています。奥村土牛、加山又造、吉岡堅二、毛利武彦、他にも大勢の画家たちが装飾性や抽象性、造形性、詩情性など様々な視点で動物を手がかりとしながら絵画世界を追求し、新しい日本画表現を生み出しています。

日本の絵画をこうして振り返ってみても、動物はいつの時代でも画家たちの創作意欲を掻き立ててくれる魅力的な存在です。永遠に変わらない動物の形態や生態は、これからの画家にとってのかけがえのないテーマとなることでしょう。

日本画の動物制作の授業では、日本の風土で育まれて来た生きものの独自の形態をみつめ、自然の造形物としての美しさを探求することを大切にしています。永遠に変わらない鳥や獣、魚など、生きものの命をみつめること、描くことは、これからの新しい日本画を生む可能性に満ちているのです。



Curriculum

日本画学科とは

東洋画の長い伝統を受け継ぎ、外來の文化の影響を吸収しつつ形成され、発展してきた日本画。その独自の造形思想と優れた材料・技法は、世界の美術の中で個性的な位置を占めています。本学科の目的は、伝統に基づく技法、造形や美意識、表現など、日本画の基礎を習得するとともに、個性豊かな新しい表現を展開し、創造する力を育てることです。

1 年次

用具の説明、絵具の溶き方など日本画の最も初歩的な基礎技法を学びながら、植物写生を行います。墨による鉄線描から制作に入り、次いで風景写生制作へと進みます。人体デッサンでは把握力を強め、また古典模写により日本画における線描を学びます。また他学科との授業交換により様々な表現方法を学び基礎表現力を身に付けます。

日本画基礎Ⅰ〔日本画材料説明、植物、古典技法（墨）〕

日本画基礎Ⅱ〔野外・風景（絹本）、古典模写〕

絵画基礎Ⅰ〔人体デッサン〕

日本画基礎Ⅲ〔人体制作〕

造形総合科目Ⅰ類（各自、他学科の授業を選択します）



2 年次

動きが速く、形を捉えることが難しい動物制作を行うことによって、忍耐強い観察力を養います。次に、人体デッサン及び人体制作で、造形としての表現力を体得してゆき、古典模写によって日本画の線、空間に対する認識を深めます。特別講義箔指導では、金銀箔、砂子、切金等の伝統技法を学び、日本画独特の造形思考を実践して習得します。

日本画基礎Ⅳ〔鳥獣魚デッサン、動物制作〕

日本画基礎Ⅴ〔意匠と造形、箔指導〕

デザインⅡ〔教職履修者必修〕

日本画基礎Ⅵ〔表現と発想〕

絵画基礎Ⅲ〔古典研究〕

絵画基礎Ⅱ〔人体デッサン〕

日本画基礎Ⅶ〔進級制作、コンクール〕

3 年次

3 年次からは各自の主体性を重視した自主制作となります。それぞれがテーマやイメージを探したり、表現方法に挑戦したりと、この時期は失敗を恐れずに、積極的に自身の制作に取り組めます。古典研究や写生旅行、12 号館地下展示へ向けての展示ゼミも行います。

絵画実習Ⅰ〔古典研究、裏打指導〕

絵画実習Ⅱ〔身体性とドローイング〕

絵画実習Ⅲ〔風景デッサン、風景制作〕

絵画実習Ⅳ〔自主制作、コンクール〕

絵画実習Ⅴ〔自主制作〕

絵画実習Ⅵ〔自主制作、展示ゼミ〕

4 年次

自由なテーマによる百号制作では大きな画面と取り組み、卒業制作への大切なステップとします。卒業制作は発想下絵（エスキース）の段階から十分に準備し、構想を練り個別の指導を行います。4 年間の成果を確認する重要な課題であると同時に、生涯の方向を決定する最初の道標として人生の基点となる作品制作となります。作品は、全学的規模で開かれる卒業制作展に出品されます。

絵画実習Ⅶ〔自主制作〕

絵画実習Ⅷ〔自主制作、卒制前提講義〕

卒業制作〔学内卒業制作展、東京五美術大学連合卒業制作展、学外卒業制作選抜展〕

大学院美術専攻 日本画コース

大学院造形研究科修士課程の教育

美術専攻日本画コース

各自、自由に課題を計画して制作を行う。発表を含めた、より実践的な活動をとおして、作家としての意識を高める。客員教授、及び各教員によるゼミを開講する。

学外研究発表展（三鷹市民ギャラリー）、学内修了制作展、学外修了制作展（佐藤美術館）を開催。

博士（後期）課程の研究領域

表現を改めて問い直し、より論理的に表現をみつめる。立体、空間造形など様々な表現も視野にいたれた自己の表現の可能性を探る。



表 デッサン：大学院1年松原由加子
上 写真：日本画学科授業風景

Faculty

専任教授	内田あぐり（主任）	三浦耐子	尾長良範	山本直彰	西田俊英
客員教授	北澤憲昭	土屋禮一	川崎麻見		
非常勤講師	岩田壮平	加藤良造	荒井経	柏原由佳	荒木享子
助手	稲垣遊	佐藤希			熊澤未来子
教務補助員	因幡都頼	古石紫織			酒井祐二



写真1：日本メキシコ国際交流プロジェクト 2011年
「OAXACA MAGICA・紙と土のちから：東京-OAXACA」ワークショップ風景
サンアグスティンアートセンター オアハカ・メキシコ

写真2：武蔵野美術大学日本画学科四年有志展示
「555 ナノメートル」 展示風景 武蔵野美術大学12号館地下

写真3：日本ブラジル国際交流プロジェクト 2014年
「東京-サンパウロ/表現の両極」展示風景
アフロブラジル美術館 サンパウロ・ブラジル

写真4：3年生授業「身体性とドローイング」展示風景

特別講義・課外授業

正規のカリキュラム授業の他には、特別講義や課外授業、国際交流プロジェクトなどが行われます。特別講義では様々な素材や技法による講義実習の他、美術評論家や国内外の作家のレクチャーやアトリエ指導を行います。

●特別講義

・和紙ゼミ：ロサンゼルス在住のアートセンター・カレッジ・オブ・デザイン教授、池崎義男氏による手漉き和紙の講義と実習です。和紙の原料である楮を煮て、各自大小の手漉き和紙の制作工程を学びます。また、世界の手漉き紙の紹介と講義があります。

・筆製作指導：筆職人、清晨堂阿部信治氏による日本画の筆の製作工程に関する講義です。学生が実際の原料で各自筆作りを学びます。

・箔古典技法指導：箔師である遠藤典男氏による箔についての説明と基本から応用までの技法に関する講義です。

・和紙への裏打ち指導：装幀師である遠藤三右衛門氏による裏打ち指導です。大作及び絹本への裏打ち指導を行います。

・絹本ゼミ：主に大学院生へ向けての大作用の絹への染織、技法や裏打ち指導です。

・課外講座：国内外で活躍する作家や美術家、研究者を招聘し、日本画学科主催として学内外へ向けて講座を広く公開するものです。客員教授による課外講座も開催します。

●課外授業

・4年生による展示実習：学部4年生大学院生有志による12号館地下展示ゼミを毎年開催しています。これは学生たちが自主的に展覧会の運営、企画、広報などに携わり、担当教員と相談をしながら毎年5月に開催するものです。会期中に学外の美術館学芸員、美術評論家、及び学内他学科の教員をゲストに招いて、公開講評会を行います。

・古美術研究旅行：日本各地に点在する神社仏閣を訪れ、様々な障壁画や仏像、古美術の研究を行います。これまでに京都や奈良のほか、那智や高野山、琵琶湖北などでも研修を実施しました。京都・奈良旅行では武蔵野美術大学奈良寮に宿泊します。

・風景写生旅行：学部3年生「風景制作」の授業の一貫で、伊豆や日光、城ヶ島等に旅行します。周辺の風景スケッチを行います。

・アートプログラム青梅への参加：例年開催される、アートプログラム青梅へ参加しています。東京造形大学、明星大学、名古屋造形大学、武蔵野美術大学（彫刻学科、日本画学科）の学生たちが有志により青梅市内の空き店舗や商店、神社などへ作品を展示することで、通常のギャラリーや美術館への展示とは異なる空間への試みとして開催しています。また地域とのコミュニケーションを持つことで、社会への関わりを深く学ぶものです。参加学生は学部4年生、大学院生を中心としています。

・国際交流プロジェクト：武蔵野美術大学の国際交流プロジェクトにより、海外の大学やアートセンターと共催で日本画学科独自の交流プロジェクトを開催しています。これは、海外の美大生やアーティストと共に展覧会やワークショップを作りながら、日本画の学生たちが海外の文化を知り、アーティストたちと広く交流するために行われるものです。アメリカのロスアンゼルス、メキシコのオアハカ、ブラジルのサンパウロなどのアートセンターで、これまで開催してきました。



1



4



2



5



3

大学院修了制作 優秀作品

- 1 猪上亜美 「うねり I」 H190xW360cm 高知麻紙 水干絵具 岩絵具 墨
- 2 松岡 学 「銀杏」 H360xW720cm 寒冷紗 金属箔 鉄粉 岩絵具 墨

学部4年生卒業制作 優秀作品

- 3 竹内めぐみ 「速」 H182xW374cm 木製パネル 墨 岩絵具
- 4 田中佑政 「自己視点 上」 H240xW360cm 木製パネル アクリル絵具 岩絵具
- 5 中西瑛理香 「あなた」 H180xW285cm 麻紙 墨 箔 岩絵具 水干絵具

人体デッサンアトリエおよび、古典技法・素材室

・人体デッサンアトリエでは、授業以外で自由にモデルをデッサンすることができます。日本画学科では、人体デッサンをするこゝで、人体の造形や素描力を勉強することを大切にしています。

・古典技法・素材室では、日本画の古典技法や模写、新旧の素材を学生たちが研究します。通常の授業の他に、特別講義で行う多様な素材、技法指導や現代作家達のレクチャーやワークショップも随時開催します。また、学生たちが素材や表現技法を実作で研究する機会を持つ為、近現代日本画家の掛軸や屏風などもスタディーコレクションとして常備しています。これらは、優れた古典表現技法の研究を学生たちが間近で行い、かつ長く鑑賞する喜びを持つ為の教材でもあります。ここで学ぶ古典技法や素材研究は、各自の絵画制作に生かされていきます。(写真載せる



料金別納郵便

武蔵野美術大学日本画学科

Department of Japanese Painting 2014

発行：武蔵野美術大学日本画学科研究室

〒187-8505 東京都小平市小川町 1-736 Tel：042-342-6050(直通)

発行日：2014 年 6 月 14 日

<http://nihonga.musabi.ac.jp/>